図書案内　2019年　１２月号

担当　2-1　石田　　2-5　中川

時の流れ～メモリー～

１２月です。そろそろ新年が近づいてきました。時が流れるのは早いものですね。そこで今回は「時の流れ～メモリー～」をテーマにした本を選びました。皆さんにも大切な人との思い出や心に残るエピソードがあるのではないでしょうか。年の終わりに読書で充実した時間を過ごしてみませんか？　本は図書館で貸出しています。

『この世界に i をこめて』　佐野徹夜

高校生活に退屈していた染井に、ある日届いた１通のメール。それは、半年前に死んだ、唯一の女友達であり、天才小説家であった吉野紫苑から送られてきたものだった。謎に満ちたメールを受け取り、止まっていた「青春」という時間の針が、音を立てて動き出す。過去に生きているような、屈折した染井の葛藤や嫉妬、後悔が小説を通して繊細かつ鮮明に綴られている。彼女の最後の言葉には……。小説を愛する全ての人に贈る感動作。(石田)

現実に期待なんかしてるから駄目なんだよ。

『時間とは何か』　池内了

与えられている時間は同じであっても、一人ひとりが感じる時間の長さに差が生まれてしまうのはなぜか。このような謎を相対性理論など用いて解明していく。この本は図を交えて分かりやすく丁寧に解説が書かれているので、時間について興味がある人にぜひ読んで欲しい一冊です。(中川)

人間以外の動物は今という時間だけを生きているように見えますが、人間は過去に流れた時間を復元することができる唯一の動物ということができるでしょう。

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』　東野圭吾

ある日、大学生三人がナミヤ雑貨店に立ち寄った。すると相談の手紙が郵便受けに入ってきた。しかし、その手紙は過去から来たもので……。この本は多くの視点から書かれているので、内容が理解しやすく読みやすい本になっています。また、最後には全ての出来事が一本の線でつながるような展開が待っています。読み終わった後は、あたたかく、明日に希望を持てる気持ちになります。(中川)

地図が白紙では困って当然です。だけど見方を変えてみて下さい。白紙なのだから、どんな地図だって描けます。すべてがあなた次第なのです。

『記憶屋』　織守きょうや

「記憶屋」という怪人の都市伝説を、大学生である遼一は子どもの頃から知っていた。忘れたい記憶を消してくれるという。遼一はその存在を信じていなかった。だが、想いを寄せる先輩・杏子が、彼女の抱える夜道恐怖症とともに、遼一のことを忘れてしまう。そして杏子のほかに、不自然に記憶を失った人がいると知り、その正体に迫る。忘れたい記憶を失うことへの正当性を問う作品である。2020 年には実写映画化も決定しているので、その前にぜひ。（石田）

ここのベンチで待っていると、記憶屋に会えるんだって。

「記憶」と「時間」の関係は？

超記憶症候群という症例をご存じでしょうか？　人の脳は「覚える」ことと「忘れる」ことを繰り返しています。しかし、超記憶症候群をもつ人は見た景色、聞いた言葉、読んだ文章、匂い、味、全ての情報を鮮明に思い出すことができます。あるいは、記憶喪失になった人が、どうして言葉を話せるのか、社会のルールを守れるのか、道具の使い方がわかるのか、疑問に思ったことはないでしょうか？　この特性を持つ人たちの脳を MRI で調べたところ、側頭葉と前頭葉をつなぐ神経線維束（鉤状束=こうじょうそく）の接続がよく、情報の伝達効率が高いことが判明しました。しかし、この鉤状束が損傷すると、自伝的記憶が損なわれるとの報告もあるそうです。

また、イギリスの物理学者ホーキングは「宇宙のはじまりには虚数の時間が流れていた」とし、虚時間には過去や未来の区別が無く、そこから派生して誕生したのが宇宙であると唱えています。しかしこれは宇宙の物理法則の一種の理論であり、現在我々が生きているような実時間が一方通行に流れるのと違って、そのベクトルは我々の想像を超えた、あるいは存在しないものであると考えられています。

このように、記憶と時間には相容れない関係があり、ただ過ぎていくものではなく、積もっていくものなのかもしれませんね。

【出典】https://www.nikkei.com/article/DGXNASGG24H0G_U4A720C1000000/